

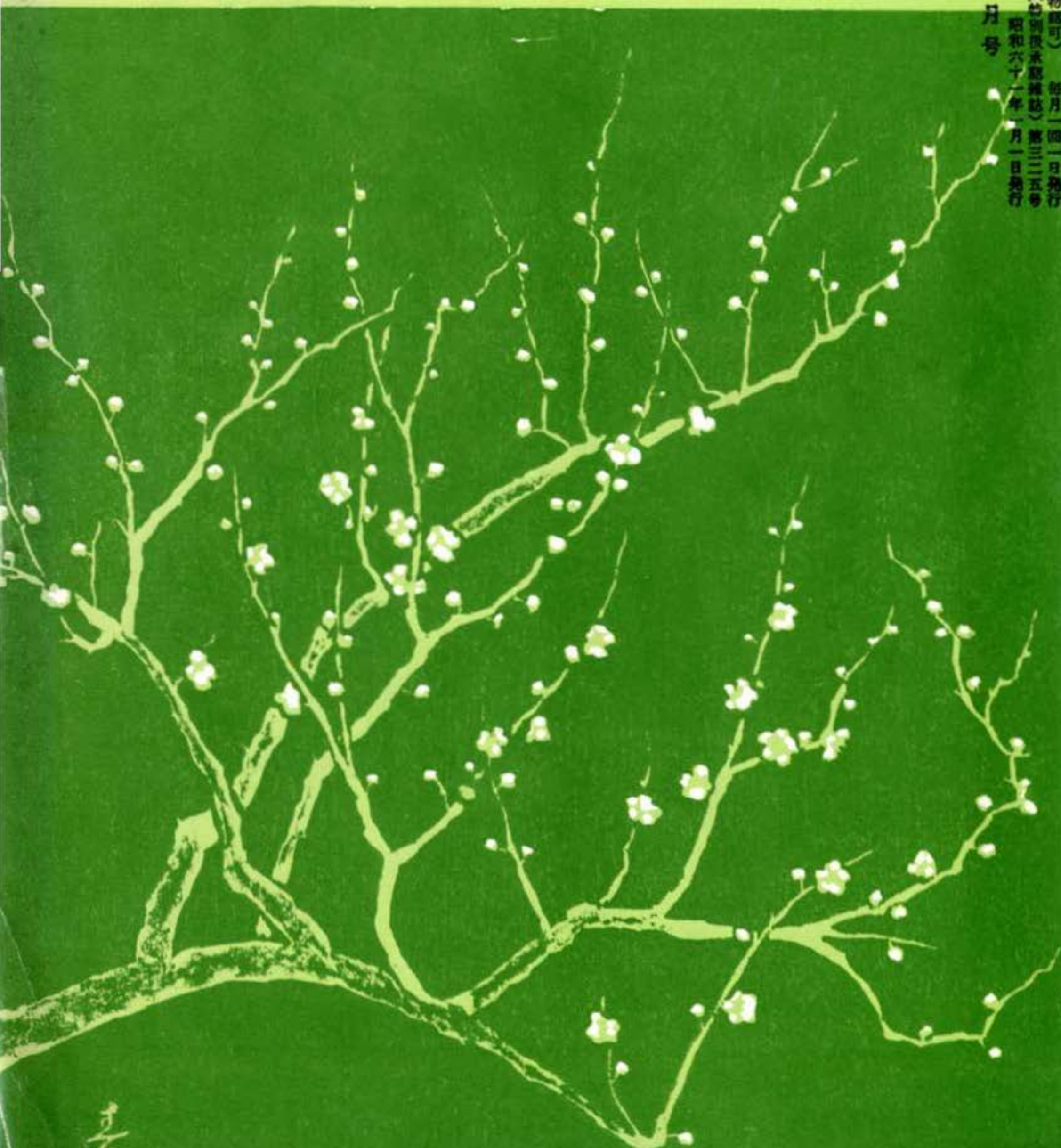
浄土

1986-1

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別扱承認雑誌) 第三二五号
昭和六十年十二月二十五日印刷 昭和六十一年一月一日発行

第五十二卷

正月号



春

「傳 弘 報 恩」

浄土門主 藤 井 実 応

傳 弘
報 恩

浄土門主 明心実応



正月号



諸仏を見奉るを以ての故に念仏三昧と名づく。

——『観無量寿経』真身観文

目次

年頭所感

輝く法灯——心に光を——……………藤井実応……(2)

極楽荘厳……………中村康隆……(6)

寅年史談……………細田隆善……(16)

<連載> 一紙小消息 ⑥

造悪の凡夫の往生……………村瀬秀雄……(10)

み仏とともに =10=

——恩師との訣別——……………安居香山……(21)

写真紀行 <「時代」を歩く…1>

江戸の心……………問川彰道……(26)

◇◇ 長篇連載小説 ◇◇

立ち止まるな善導 第19回

英才の秘密

……………寺内大吉……(31)

挿絵 松濤 達文

表紙絵「うめ」 松浦春子 画

年 頭 所 感

輝く法灯——心に光を——

浄土門主 藤井実応

○無量寿のみ名となえつつ

昭和六十一年元旦おめでとうございます。

六十年代の第一年の歳を迎えました。有名な知恩院の大鐘——十数人、力を協せて鐘を打つ——の除夜の鐘が響き流れる音を聞き了ると、早や年のはじめとなったとの感がわいてきます。今迄は徹夜したこともありましたが、此頃は四時半頃迄睡眠をとり、洗面、若水（といっても水道の水）を先ず御内仏に供え、小時間おつとめ、そして五時半になると、例年の如く阿弥陀堂、大師殿での元旦のおつとめをし、諸堂参拝、八時頃古経堂にて在院職員と共に賀詞、お屠蘇を頂き、それぞれ部署に着きます。

一年の計は元旦にありで、本年の予定計画を立てるのですが、昨年は浄土門主、知恩院門跡としての重責を至らぬながら無事果せて頂き、また全日本仏教会長としての責務も無事つとめて参りました。これひとえに仏縁深き皆さまの御指導、御援助の賜と感謝いたします。本年も皆様の御指導の下に全身ささげて尽してゆきたいと願っております。

本年も教化の目標は「輝く法灯」——心に光を——です。

昭和六十二年は浄土宗三上人の遠忌を迎えます。それで総本山知恩院は六十二年四月六日から十二日まで三上人大遠忌法要が行われます。各大本山に於ても、浄土宗各寺院にてもその前後に営まれることになっております。すでに知恩院にては前から、その準備をみな宗本一体協力一致進めており、本年は特に、一層充実、遺漏なきよう進めねばなりません。

三上人とは浄土宗第二祖鎮西聖光上人、同第三祖記主良忠上人、及び知恩院第二世勢観房源智上人です。昭和六十二年が、聖光上人、源智上人の七百五十年遠忌、良忠上人の七百年遠忌に当たります。

○第二祖 聖光上人

法然上人には門弟三百人に及んだといわれ、中には大宗教家と申すべき優れた大弟子もありましたが、正しい法統を継がれ、浄土宗の二祖となられたのが鎮西（九州）の聖光上人です。鎮西を中心に念仏を弘められました。

筑前国香月庄（今の福岡県北九州市）に生れ若くして比叡山にて天台の学問を修め、郷里の油山で修行者の指導をされていましたが建久八年（一一九七）三十六歳の時、上洛し、吉水の庵室に法然上人を訪れ、上人にあい、み教えを受け、非常に感激して直ちに弟子の礼をとり、前後八年間も、上人の膝下にて念仏の教えを伝承し、師より念仏の奥義を書かれた『選択本願念仏集』を授かりました。元久元年（一二〇四）鎮西に帰り、法然より伝え承けた念仏の教えを多くの人々に弘通せられました。聖光上人は『徹選択集』をはじめ、多くの著作があります。晩年、肥後の往生院（今は熊本市池田に移転）に於いて、弟子たちと共に四十八日間の別時念仏会を修せられました。法然上人の滅後、弟子の間に、師の教えと異なる教えを説く者があり、義を水火に争い、論を蘭菊に致す状況をなげき、一には恩師報恩のため、次には師の正義を後の世にも伝え弘めん為に、

別時中に『末代念仏授手印』を著し、恩師法然上人の正義を明らかにお示し下さいました。

○第三祖 良忠上人

鎮西上人にも御弟子がたくさんあったのですが、その正統を受け継がれたのが記主良忠上人です。島根県三隅町の生れで、広く仏教を学ばれて後、三十八歳の時、鎮西の聖光上人を訪ね弟子となられ、そのみ教えを悉く伝承されました。聖光上人は「良忠は自分が若更わかがえったと同じだ」とよろこばれ、浄土宗三祖として良忠上人に御可決定されたのであります。郷里の中国地方に、また長野にも京都にも布教されていますが、主としては関東地方に念仏の教えを弘められました。鎌倉では仏教者の指導的立場につかれ、晩年には京都に上り、念仏の乱れを正されています。上洛中東山の赤築地あかつじ（今の清水のあたり）で、源智上人の門流と双方の教えを照し合され全く教えの一致していることが分りました。弘安十年（一二八七）、八十九歳にて鎌倉悟真寺（今の大本山光明寺）で入寂されました。多数の著述をした人への尊称である「記主」が伏見天皇より勅諡され、記主禪師良忠上人と申し上げています。昭和六十二年が七百年になります。

○知恩院二祖 勢観房源智上人

源智上人は平重盛の孫に当り、師盛の子と伝えられ、十三歳の時法然上人の弟子となられ、常に法然上人に御給仕申し上げ、み教えを承けて立派なお弟子となり、師の法然上人臨終の前に『一枚起請文』を授かり、また師上人の房舎、所持品などを相続された大弟子です。聖光上人とは特に親しくたえず文通しておられ、しかも同年（一二三七）にお亡くなりになっています。

源智上人は法然上人の寂くなられた建暦二年（一二二二）の十二月に恩師報恩の三尺の阿弥陀尊像を建立されました。その仏像の胎内には源智上人の発願文と念仏結縁の人々数万人の名が記し納められていました。

それは昭和五十四年、滋賀県信楽町^{しがらき}の真言宗の玉桂寺で発見されました。その発願文には「師の大恩は山よりも高く、海よりも深い、骨を砕いて謝しても謝しがたい」と述べ、報恩の万一にもとこの阿弥陀尊像を建て、同信同行同朋の結縁の人々と共に決定往生せんことを願うておられます。

法然上人の滅後十六年、嘉祿三年（一二二七）には念仏衆徒に大禅匠があつて、大谷の御廟をはじめ、建物など一切破壊され、念仏衆徒をあるいは捕えて罰し、あるいは都より追放するなど、いわゆる嘉祿の法難がありました。その後法然上人の二十三回忌の文暦元年（一二三四）に、荒れ果てた、その地に院の基礎を建立され、知恩院大谷寺と称しました。後に四条天皇より「華頂山、知恩教院、大谷寺」の勅額を賜りました。「知恩」という院名に特に留意して頂きたいのです。

時勢と社会の状況に随い、聖光上人は九州を中心に（久留米市、大本山善導寺）、良忠上人は関東を中心に（鎌倉市、大本山光明寺）、源智上人は京都を中心に（総本山知恩院の基礎）を中心に、三上人とも元祖法然上人の教えを正しく伝承し弘通されました。それがそのまま知恩報恩の御生涯、念仏者の御手本となりました。善導大師は「自ら信じ人を教えて信ぜしむるは難中の難なり、大悲普く伝えて化するは真に仏恩を報ずる者と成る」と説かれ、法然上人も「自らの往生の為には専心念仏するを心得、有縁の人の為には身命財を捨てても法を説け」との戒めがあります。その範を示されたのが三上人であります。

私共も各々分に随い、今為す脚下の事は如来よりの仰せと心得、南無阿弥陀仏と全力ささげてつくしゆくよう心得たいのであります。申し上げるまでもなく、現下少年の犯罪、暴力、いじめの事件、教育の問題、急速に高齢化社会となって老人への教化施設等の問題もあり、仏教徒としてもそれに対する教化協力の責あることを感じます。かくして本年も、念仏の信を本とし、同信同行同朋有縁の人々と共に、各々その分をつくし、協力して明るい年でありますようにと念じ新年の賀詞といたします。

年頭所感

極樂莊嚴

大本山増上寺法主

中^{なか}村^{むら}康^{こう}隆^{りゅう}

浄土をねがって

ゆく道が かたじけない

石ころの道も

山坂も

道ばたに咲く花も

——榎本栄一『光明土』娑婆をゆく——

人生には石ころの道もけわしい山坂もあります。石ころにつまずいて転倒したり、坂道に息切れしてうずくまってしまうたり、失敗やら落胆やら意気消沈、何をなす気もなくなるようなことも多い。その反面有頂天になって我を忘れ羽目を外して後悔のほぞを噛むこともあります。

そんな道を歩くためには、しっかりとした心の支えを保つことが必要なのですが、とにかく、われわれはうぬぼれて已れ一人の力に頼り勝ちです。そうして、つまずいたり絶望したりするのです。中には欲望の泥沼にどっぷりつかって欲の悦楽のみを追いかけ廻して、それが人生唯一の目的かのように思いこむ人すらおります。

このような欲望のなかに頭をつっこんだ生き方を、お釈迦さまは逆立ちした人生だとさとされました。そんな人は死んだ後に逆吊しの苦しみを受けるといわれ、その倒懸（逆吊し）を救うのが盂蘭盆の行事だと説かれてきたことは、既に承知でしょう。

しかし、とにかく、そんな誤ちを犯しかねないのも、私たち凡夫の常でありましょう。そのような凡夫のために、浄土へ行きつくまでひたすらみ仏のみ救いを仰ぐべきことの必要を説いたのが、念仏往生の教えといえましょう。私たちの行く道が、いつも六欲煩惱に追いまくられ、黒雲のような愚痴無明の闇路を、火と燃えすがる瞋恚いかりのうねり、怒濤のように逆まく貪欲むさぼりの渦にのみこまれかねないのが事実なのです。

ただ念仏の一筋のみが、この暗愚にして愚劣な私どもの歩むべき唯一の人生行路とさとされたのが善導さまでした。二河白道の譬えがそれです。

さて、私の学生時分の恩師、英文学者故松浦一先生はめじは歌われております。

生まれては野越え山越え旅路ゆく

ひとに賜いしみ仏の杖

と。この誘惑に満ち、險難に途迷い勝ちな人生を渡るには、み仏の賜いし杖——お念仏をたよりに生きぬくべきだというのでしょうが、本当にその通りだと存じます。

唐の時代でしうか、宋の時代でしうか、中国の郢州芭蕉山に住された新羅僧慧清禪師、俗に芭蕉和尚は、いつもたずねてくる僧たちに、杖を持ってきたかと聞いたといひます。修行僧はいつも登山する行者が金剛杖をたよりとするように、道中杖を持つ習しがあつてのことでしょう。そして、もし持ってますといふと、それならわしのをやるうといわれ、もし持っていないといふと、それならとりあげるぞといわれたといひます。

芭蕉和尚の杖とはつまり心の杖だったので。無門関四四則にある話で、無門禪師はこれについて「扶^{たす}かつては過ぐ断橋の水、伴うては帰る無月の村」と詠んでおります。人生には、しばしば橋の落ちた溪川の水を渡らねばならぬことがあります。急流に足をとられて流されかねないところも杖あらばそれを支えに渡り得るというのです。月の無い闇夜の晩に村里への道を急ぐ人も時として石につまずいたり畔路を踏みはずしかねません。一本の杖があればそれをたよりに村里のわが家に戻り得ようというのです。

このわが家とは、極樂のことを指すのでしう。法然さまは、「私はもともと極樂から来た」と仰せられました。二度とないこの私の生命、その源をたずねれば、大宇宙のありとあらゆるものをあらしめ、生きとし生けるものを生かしめたもう無量寿・無量光のみ仏から頂き、そのみ生命の恵みの中に生かされて生き得ている身なのです。

念仏の詩人、榎本栄一老人は、

私は手ぶらで

今朝も如来の家へ

あがりこみ

微風をいただき

日のひかりをいただき

——『難度海』手ぶら——

と、詩っています。日のひかりも、微風も、流るる水、そよぐ草の葉、すべてこれ極楽の莊嚴です。み仏のわれらに賜わる「ひたぐれないの生命」の輝きなのです。

このお浄土の道をお浄土に辿りつくまで、私たちは念仏を杖とし支えとして、いつもみ仏のみ恵み、お育て、お導き、み救いを仰いで、歩み続けねばなりませんまい。

念ずれば

花ひらく

と坂村真民さんは詩っています。私たちも仏を念ずる真摯な真心の中に生涯かけて不滅の花を咲かせ、それを仏前花として極楽浄土のみ仏の前にお供えし、また多くの念仏行の人々へのやさしい励ましともしたいものです。それこそが、拙い私どもの、せめても極楽莊嚴の営みともいえるのではないのでしょうか。「花は合掌に開けて春に開かず」と菅原道実も詩っております。春に咲く花は所詮一時の花です。花の命の短かければ短かいほど、愛着もまた深いともいえましよう。しかし、われわれの咲かすべき花は、一時の花ならぬ不滅の花でありたいものです。それこそが、唯一の仏前花としみ仏に供え得るものといえましよう。

造悪の凡夫の往生

村瀬 秀雄
むら せ ひで お



「十方に浄土おほけれど西方を願は、十悪五逆の衆生の生るる故なり」

阿弥陀仏が法蔵菩薩と名乗ってご修行中であった時に、世自在王仏の仏力によって、あらゆる仏の世界を見ることができた。しかしその中には凡夫が往生できるという仏の世界がなかった。あるいは長い間にわたって難しい修行を積むか、あるいは生涯にわたって戒

律を守るか、あるいは多くの資産を投じて塔をたてたり仏像をつくったり、多くの者がなし得ない修行でなければ往生できない世界ばかりであった。まして悪事を犯した者が往生できる世界は、どこにもあるわけがなかったのである。法然上人は次のように説いた。

「阿弥陀仏が法蔵菩薩であった昔に二百一十億にものぼる諸仏の浄土を見給い、それぞれ

仏の誓願によって得られる利益にいたるまでのことを世自在王仏の御前で理解できた。しかしその中にはわれら如き誤った考えによって迷っている凡夫には、往生できる方法がなかったのである」(念仏往生要義問答)

凡夫が諸仏の浄土に往生したいと願ったにしても、あたかも弓矢を持たずに空飛ぶ鳥をとるように、全くできないことであつた。上人は次のように述べた。

「煩惱で苦悩している人々が極楽仏土以外の仏土に往生したいと願つても、とうていできないことである。例えば弓矢を持たずに空を飛ぶ鳥をとろうとするのと同じであるし、足のない人が高い木に登って梢の花を手折ろうとするようなものである」(鎌倉の二位の禅尼へ進ずる御返事)

そこで法蔵菩薩は凡夫であつても往生できる国土を構えたいと考え、誰でも念仏を唱えれば必ず往生させると誓ひ、西方極楽浄土を莊嚴して阿弥陀仏になり給うたのである。こ

こで初めて凡夫も往生できる道が開かれた。善導大師は次のように説いた。

「阿弥陀仏はどのような素質や才能を持つてゐる者でも、たとえ愚人や悪人であつても必ず往生させたいという慈悲心から念仏往生の本願をたて給うた。もし人が阿弥陀仏の本願を心から信じ、余行を混えずに念仏を唱えて極楽浄土に往生したいと願つていれば、その者は必ず往生できるのである。念仏を唱えていた者が一人でも往生できないことがあつてはならぬとして、阿弥陀仏は無量の光明を放つて十方の世界をあまねく照らし、念仏を唱えている者を洩らすことなく光明の中に収めとり、必ず往生させると誓ひ給うた。この誓ひによつて生涯を通じて念仏を唱え続けている者から、臨終に初めて十声一声の念仏を唱えた者に至るまでのすべての者が往生できるのである。このことは念仏を唱えた功德と仏の本願力が和合して、往生し易い行となつてゐるからである」(往生礼讃偈)

釈尊はどのような者にも適應するように、多くの法門を開き給うた。經典の中には聖人や賢人に適した法門があり、道心堅固で戒律を守った者、難行に耐える者等のための教えがある。その中で觀無量壽經は末世の凡夫のために説き給うた經典である。この經典は王子の反逆によって憂惱する国母たる韋提希夫人のために説かれたが、釈尊は夫人ばかりでなく、遠い将来の凡夫のために説くのであるとの給うた。大師は次のように説いた。

「釈尊の慈悲は夫人ばかりでなく、遠い未来の凡夫にも及ぶのである。この法門は迷いの世界にあって苦惱している凡夫のためにも恩沢を被らせる教えである。凡夫は煩惱によって智慧が害され、常に苦惱していて支障が多い。妄りに愛欲に執着し、貪る心をやめないために、足許に大きな火坑が口を防けて、凡夫がおちてくるのを待っている。人々は火坑を通じて地獄、餓鬼、畜生の世界におちてゆくことに気がつかない。たとえ縁に恵まれて

仏道修行に入っても、いつか眼や耳に、香りや味わいの快樂を求める欲望を起し、折角の修行も享樂に負けて功德を失ってしまった。しかし釈尊は仏の教えを見棄ててしまうような者にまた常に憂い、決して凡夫を見捨て給うことがないのである」(觀經序分義)

韋提希夫人が釈尊に憂いと悩みのない世界があることを教え給えと懇請すると、釈尊は清くて妙なる諸仏の世界を次々に見せしめ給うた。しかし夫人は諸仏の世界から選択して極樂淨土に往生したいと願った。そこで釈尊は極樂往生できる行として定善十三觀を説き給うた。定善は思いをこらして極樂淨土の莊嚴を觀想する修行である。釈尊は定善を説き終ってから、自ら進んで散善を明かし給うたのである。散善は心が散乱している日常生活のまま修められる行である。散善には上品と中品と下品に分れ、それぞれに三生があつて九品に分れているが、何れも凡夫の往生を説いた法門である。中でも下品上生は惡事を

犯して少しも恥じることを知らない凡夫の往生である。下品中生は戒律を破り、教団の物を盗み、間違つた仏法を説き、悪事を行うことを自慢にしている凡夫の往生である。下品下生は最も重い罪である五逆十惡を犯した者の往者である。五逆とは父殺し、母殺し、聖者殺し、仏身を傷つけて出血させ、教団の和合を破るの五である。これ程の極惡者であっても十声一声の念仏で往生できたのである。

九品にはそれぞれ各種の往生の行が説かれているが、九品に通じての行は心から本願を深く信じ、極樂往生したいと願つて念仏を唱えることである。そして下品上生には一声の念仏を唱えることによって、五十億劫にさかのぼつての生死の罪が除かれて往生できたと説かれている。また下品下生には十声の念仏を唱え、その一声一声の念仏によつて八十億劫にさかのぼつての生死の罪が除かれて往生できたと説かれている。何れにしても念仏によつて計り知れない遠い昔から今に至るまで

の罪が除かれたのである。これ程の罪が除かれたのは念仏を唱えた功德によるのであり、念仏以外の諸行の功德では到底できないのである。法然上人は次のように説いた。

「下品下生は諸惡をつくり、更に五逆すらも犯した極惡人の往生である。これ程に重い罪は余行を修めた功德によつてでは減しきれないのである。ただ念仏を唱えたという大きな功德によつて初めて極惡の罪を減することができるのである。このように極惡最低の凡夫が往生するためには、極惡最高の念仏の行によるしか方法がない。例えば無智と煩惱が原因となつておこす重病には、中道の正法を会得させるといふ妙藥によるのでなければ治せないのと同じことである。五逆十惡の極惡を犯した重罪人を治すには、万病に効く靈藥である念仏の功德によつて初めて救われるのである。これ程の重病を治す藥は念仏以外にあるわけがない」(選択集)

平重衡は治承四年(一一八〇)十二月二十八

日に南都を攻めたが、その時に東大寺を焼いてしまった。それから間のない元暦元年（一一八四）二月七日に一の谷の合戦があり、重衡は生捕りにされてしまった。やがて虜囚の身になって都に移されたが、後生の菩提について法然上人から教えを受けたいと申し出た。こうして法然上人は招かれて重衡と対面したが、重衡は喜んで次のようにいった。

「このたびの合戦で生きながら捕われの身となったのは、今一度上人にお目に掛りたいためであった」（勅修御伝第三十）

上人は重衡に戒を授け、念仏の法門を詳しく教えたが、その中で次のように説いた。

「迷いの世界から抜け出すための修行にはいろいろの道があるといっても、末法となつて穢れた世となり、このような動乱の時に当つては念仏を唱える行が最も勝れている。いかに罪業が深く重い者であっても、愚かで何も知らない者であっても、念仏を唱えれば必ず極楽往生させ給うのが阿弥陀仏の本願なので

ある。罪が深いからといって卑下してはならない。十悪五逆を犯した者でも往生したいと願つて念仏を唱えれば往生できるし、一念十念の念仏でも、真実心で唱えれば仏の来迎を蒙ることができる」（平重衡に示す御詞）

そして上人い重衡に一心に念仏を唱えるようにと勧めた。その後重衡は鎌倉に送られたが、東大寺、興福寺の僧徒の要求で奈良に連行され、文治元年（一一八五）木津川で斬られた。同じ年に東大寺では大仏開眼の供養会が盛大に営まれたのであった。

上人は、往生できるかできないかは人の善悪等によるものでなく、本願を信じるか信じないかであるとして、次のように説いた。

「極楽浄土に往生できるのは、念仏を唱える者の善悪によるものでない。ただ阿弥陀仏の本願を信じているか、信じていないかによつてきまるのである。十悪五逆を犯した者が臨終に僅か一声十声の念仏を唱えただけで往生できたというのは、心から本願を信じていた

からである」(往生大要抄)

また上人は次のように説いた。

「定善の観想には各種の修行による十三観があり、散善の修行も様々に分れて九品の区別がある。たとえ定善の観想を修めようと思つても、凡夫の心の中に煩惱が奪馬のように荒れ狂つて五官の間を馳けめぐり、とうてい修行に耐えられない。散善の諸行を修めようとする、凡夫の心は猿が木の間を飛び廻るように、次々に十悪を犯してしまふ。煩惱の心を静めようとしてもできないし、十悪をやめようとしても無理である。いま下品下生の往生をみると、十悪五逆を犯した者が臨終に善知識に教えられて一声十声の念仏を唱えることができて、極楽往生できたのである。これこそわれ等に相応しい教えであるといわざるを得ない。むかし中国に雄俊という人がいて、七度も還俗した悪人であった。雄俊が寿命を終えたと閻魔の庁に連れて行かれ、獄牢から人間界第一の悪人であると報告された。その

時雄俊は大王に申したてていった。

『自分は存命中に観無量寿經を読んだが、五逆の罪人が南無阿彌陀仏と唱えたことによつて、極楽往生できたと説かれていた。七度も還俗したといつても、五逆を犯した覚えがないし、十声より遙かに多くの念仏を唱えてきた。もし雄俊が地獄におちたとすれば、三世の諸仏は妄語を犯し給うたことになる』

閻魔大王は声高く叫ぶ雄俊の言葉を聞いて返す言葉がなく、道理の前に宝冠を下げて雄俊を拜んだ。阿彌陀仏は誓願の通りに雄俊を金蓮台に乗せて、極楽浄土に迎え給うた。まして我らは七度還俗した者でもないし、生涯を通して念仏を相續しているのである。恵心僧都は説いている。

『念仏は男女貴財を問わず、行往坐臥に唱えられ、誰でも容易に修められる行である。念仏を唱えてさえいれば、臨終に必ず仏の来迎を蒙つて往生できるのである』

これこそ真実である」(元久法語)(つづく)



寅年史談

ほそだりゅうぜん
細田隆善

(東京・江東区勢至院
俳号・豊明住職)

昭和六十一年は干支えとの上から丙寅ひのえとらにあたるので寅の年
といい、十二支の動物の上から虎年といえます。西暦は
一九八六年、仏誕二五五二年、明治以来一一九年です。
寅は方位の上から東北東を指し、時刻の上から午前四時
またはその前後二時間をいいます。

寅の文字は「つつしむ」の意、家の中で人が両手を胸
につけて恭敬の態度を表している象形文字からできまし
たが、原意がうすれ、音を借りて十二支の一つになりま

した。虎の文字は上部が虎の頭、下部が足の形からでき
た象形文字に由来します。私の近くに中国料理店「虎」
がありますが、トラとかタイガーと読むのかと思いまし
たら「フウ」と仮名がつけてありました。虎は中国語で
フウと発音するからです。フウは虎の呼吸音から転じた
といわれています。日本語の「とら」は斑まだらの意味があり
ますが、朝鮮語で虎を「つる」といいそれが転じて「と
ら」になりわが国に伝わったといわれています。

虎は食肉目ネコ科の猛獸、広くアジア大陸に分布し、大きいものは身長2m以上、体重三百kgに達します。シカ、イノシシ、鳥、昆虫を食べ、ときには人間まで食べるので恐れられています。ただし虎は日本に居住したことがなく、虎の化石は発見されていません。虎の皮の數物は珍重せられ、古い時代からわが国に伝来しました。『日本書紀』第十九卷に、欽明天皇六年（五四五）、膳臣巴提便が百濟救援のために朝鮮に渡り、そのとき虎退治しその皮を持ち帰ったとあります。天武天皇朱雀元年（六八六）、新羅の王子が来朝したとき虎の皮を献上したとあります。実際に生きた虎がわが国に輸入されたのは宇多天皇寛平二年（八九〇）であって、当時大評判となり、画家巨勢金岡に写生させたとあります。

虎は最強の動物であることから四神の一つ白虎として神格化されました。四神は中国漢の時代から東西南北の四方を守護する神として祀られてきて、わが国にも伝来し古墳の四方の壁面に描かれたものも近年発掘されています。古来天皇即位式の飾り旗に四神の旗が使用されています。青竜は東方を守る青色の竜、白虎に西方を守る白い虎、朱雀は南方を守る赤い鳥、玄武は北方を守る黒

色の亀と蛇であります。白虎隊の名は四神の白虎からつけられました。

奈良の法隆寺には、わが国最古の絵画として有名な国宝の玉虫厨子の捨身飼虎の図があります。玉虫厨子は、七世紀のころ、二千五百六十三匹の玉虫の美しい羽根をもって飾られたのでその名がつけられました。この厨子の一面に、『金光明經』第四捨身品をはじめその他の經典に説かれている捨身飼虎の図が描かれています。それは薩埵王子が飢えた虎にわが身を食べさせる説話、王子が衣服を脱いで竹に掛け、投身し、虎に食べさせる教場面が一枚の絵として描かれていて、かつこの絵は油彩の一種である密陀絵であることも有名であります。またこの絵の手法が法隆寺の大壁画に影響し、天平の絵因果經、さらに大和絵、絵巻物へと展開し、玉虫厨子の絵はわが国絵画史上きわめて重要な意味をもつものであります。また捨身飼虎の説話は、釈尊の本生譚の中にもつとも有名な説話です。薩埵王子が城外竹林において、七匹の子を生み食べ物がなくて死に瀕している母虎に出会いました。虎はわが子の虎を食べようとしているので、王子は裸身となって、わが身を母虎に食べさせて母子の虎

を救いました。王子はつぎの世に生まれて釈尊となられたという仏の前世を語る本生譚であり、仏の慈悲思想を表現した説話であります。

『万葉集』の時代には、虎の皮の敷物を見るだけで実物の虎を見ることがなかったために、虎の歌はまったく少ないわけです。歌は一首だけ、長歌は二カ所に虎がでているだけです。『万葉集』十九卷につぎの一首があります。

虎に乗り古屋を越えて青淵に
ふるや あおふち
蛟竜捕り来む剣大刀もが
みのち つるぎたち

「もが」は願望、蛟竜は竜のこと。強い虎に乗って竜を捕えてこれるような立派な刀剣が欲しい意味です。同巻長歌の一節に、

からくに
韓国の虎といふ神を生け捕りに八つ捕り持ち来その
皮を畳に刺し……



——法隆寺玉虫厨子(国宝)——



——玉虫厨子の
捨身銅虎図——

とあって虎を神格化しています。昼は敷物のこと、刺すは縫うことの意味です。『万葉集』二巻の長歌の一節に、

虎が吼ゆる諸人のおびゆるまでにささげたる……

とありますのは、軍団の勇ましい様を虎の猛ける様子にたとえた言葉です。

『古今集』『新古今集』には虎の歌は一首もありません。『夫木和歌抄』につぎの藤原定家をはじめ虎の歌は十首あります。

たか山のみねふみならすとらのこの

登らん道のすゑぞはるけき

藤原定家

平安時代には、五位以上でないと虎の敷物は許されませんでした。

薬師仏の脇侍十二神将は十二支に配され、頭上に虎を乗せているのが真達羅であります。寅の日に毘沙門天を祀る寺へ参詣し縁日がたちます。正月最初の寅の日に毘沙門天や薬師仏に参詣することを初寅といい、一の寅、

二の寅、三の寅があつて、俳句の季題になっています。今年の初寅は一月十日です。

はつとらの威をかるや雨もふる狐

季吟

「虎が雨」という俳句の季題があります。建久四年（一一九三）五月二十八日、曾我兄弟が富士の裾野において工藤祐経の仇を討ち、また兄弟も討たれました。この日降る雨は、曾我十郎の愛人である大磯の遊女虎御前の涙が雨になったといわれたものです。

草紙見て涙たらすや虎が雨

路通

寅年生まれの人々の生涯の守り本尊は虚空蔵菩薩であります。この菩薩は福德を授け天災地変を除くといわれています。

加藤清正の朝鮮での虎退治の話はよく知られています。が、秀吉は後陽成天皇に生け捕った虎をご覧に入れたことがありました。愛知県の鳳来寺に鳳来寺薬師が安置されています。岡崎城主松平広忠が鳳来寺薬師に男子出世

を祈願し、天文十一年（一五四二）寅年十二月二十三日に徳川家康が生まれました。このため家康が天下統一してから鳳来寺薬師へ寺領八百五十石と山林三里四方を寄付しました。家康が生まれたとき鳳来寺薬師堂の十二神将の虎の神像が姿を消しました。元和二年（一六八二）四月十七日、家康七十五歳で死去したとき、その虎の神像が再び姿を現したといわれています。このためこの薬師を寅薬師といい、以来各地に寅薬師が安置されるようになりしました。

古来襖絵などに虎の名作が多い。虎に竹を添えるのが通例で、狩野探幽、狩野元信、狩野山楽、雪村などが有名です。またわが国水墨画の祖である黙庵に四睡図が有名であります。中国唐代の高僧豊干禅師と弟子の寒山と拾得、虎との四者が一緒に眠っている絵であります。雪舟をはじめ画家が好んで描いた絵に虎溪三笑の図があります。中国六朝時代廬山の高僧慧遠法師が詩人の陶淵明、陸修静と三人で虎溪という谷で大笑している図であります。

昔、女性に虎の名がつけられることがありましたが、これは強健な男の子を生み育てて欲しい願いからでし

た。かつて戦時中、出征兵士に虎の絵入りの千人針の腹巻が贈られたのは、虎は千里行って千里帰るからであります。兵士の無事帰還を願ったからであります。

虎の郷土玩具は全国に多くとくに張り子の虎は多い。茨城県東海村の村松虚空蔵は十三詣りの祭礼が有名。十三歳になると智慧を授かり開運のお守りとして張り子の虎を求めるもので、虎の玩具はここを北限として北になり。虎の玩具は朝鮮大陸に近い方面に多い。静岡県浜松の張子の虎は参勤交代の街道筋として武士の間に人気がありました。前出の鳳来寺山麓では寅童子こけしが有名。大阪の道修町少彦名神社の神農さんの張り子の虎は厄病退散で知られています。岡山県の西大寺の張り子の虎は一門の厄を除くという風習があります。鳥取県の十支の彩色木製の郷土玩具は全国に知られています。島根県の出雲の張り子の虎は、子供の節句を飾り、首振り、肩をいからせ、四つ足をふんばって愛嬌があり、魔除けとされています。香川県高松の張り子の虎も知られています。また熊本県宇土市の張り子細工の虎も全国に売られています。

み 仏 と と も に

=10=

—恩師との訣別—



や す い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

昭和十八年十二月、私は学徒出陣して、軍隊生活に入
った。今にして思えば、この時、日本は軍国主義の嵐の
中で破滅への道を、急角度で進撃していたのであった。
戦時教育を受け続けていた私は、こうした破滅への道
に乗せられながら、盲目であった。そして、教えられる
ままに、尽忠報国、滅私奉公を叫び、勇躍、出陣の途に
ついたのであった。

この出陣の前後における母との別れについては、すで
に書いた。そして、本当に死ぬ覚悟もして、敦賀の連隊
に入り、幹部候補生に合格し、豊橋第二予備士官学校に
と進んだ。兵科は歩兵であった。大東亜戦の戦局は、こ
の頃苛烈を極め、米軍の反攻も本格的となり、学徒兵の
士官候補生をゆっくり国内で養成していられなくなっ
た。そこで国家は、全国の予備士官学校にあらばってい
る学徒兵を、満州や南方の現地で教育することになり、
成績の優秀な者と、身体の強健でないもの以外を外地に
送り、残った者を京都の福知山に集めた。

福知山の連隊は、フィリッピン作戦で全滅したため、
その空き家が教育隊となったもので、第十一期の残留学
徒兵は、全国からここに集められた。総員、千八十五名

であった。何故こんな数字をはっきり私が覚えているかと言うと、昭和十九年十二月の卒業式に、私が代表して答辞を述べたからである。教育隊での話や、これにまつわるみ仏達のこととは、改めて書きたいので、ここでは私が、豊橋の第二予備士官学校から、多分六月頃福知山の教育隊に転校してきたことだけを書き留めておきたい。

十九年の十二月卒業すると、立派な見習士官となった私はただちにこの教育隊の教官に任ぜられ、ここで終戦を迎えるまで、後進の学徒兵、第十二期生、第十三期生を教えることになる。見習士官となった私は、凛々しい



——在りし日の林彦明上人——

姿で、はりきって軍事教育に励んでいた。それは、私の人生にとって、今にしてみれば悪夢でしか過ぎないのであるが、その当時にあつては、華やかそのものであつた。学問とか、仏道とかは忘れ去って、軍国日本の為に、有頂天になっていた時であつた。

当時、アメリカは、毎日のようにB29による空襲を繰り返し、日本全土を灰燼と帰せしめようとしていた。そして新聞は、七月十六日に沼津市を空襲し、全市が灰燼となったことを報じていた。

沼津はいうまでもなく私の師籍の乗運寺のある所で、そこには師匠の林彦明大僧正も居られた。時々手紙を出していたが、もう二年近くも師匠に会っていなかった。戦時中のことでもあり、戦災で焼けていることもあって、連絡の仕様もなかった私は、隊長の許可を受けて、沼津まで見舞いにでかけることにした。

福知山から京都にでて、東海道線で沼津まで行く汽車の旅は、危険極まりないものであつた。艦載機の機銃掃射、艦砲射撃とアメリカの攻撃はすさまじく、その度に汽車を降りて退避するということを繰り返しながら、やっとの思いで、真夏の未明、沼津の駅に着いた。そして



——沼津市乗運寺——

駅頭に立った私は、余りのすごさに啞然として、プラットフォームに立ちすくんだ。駅舎は勿論のこと、街は全焼していた。そして、千本松原の松が遙かに見えていた。

「師匠達は生きているのであろうか」——と、私は、そんな危惧をいだきながら、焼野原の街を急いだ。寺に辿りついた時、勿論寺は影も形もなかった。鐘楼堂の石積みだけが残っていた。あちらこちら探したが、誰もいない。また薄暗かったのであるが、一向に人影も見えない。ふと、何か音がしたので、小さな穴をのぞいて見ると、令息の輝彦師が顔を出されたので、びっくりした。防空壕で寝ておられたのである。

「御前様はどうしました」

御前様というのは、彦明上人を私達がそう呼んでいたのである。私は、挨拶もせずこう尋ねた。

「幸い、軽い怪我で助かった。千本松原の知人の家に避難しておられる」

私はホッとした。よくぞ助かったものだ。これもみ仏の加護であつたのだ。来てよかった。とも角、早く会いたい。私は教えられるままに、仮寓へと向つた。

彦明上人は、布団の上に坐つて、静かに応待された。思ったより静かであつたが、流石にやつれておられた。焼夷弾による火傷は、痛々しかったが、生命には別状はなかつた。私は生きて再び師匠に会えると考えていなかつただけに、この面晤は、涙のでるほど嬉しかった。

しかし、師匠の精神的ショックは、大変なものであつた。大切にしておられた土蔵の蔵書はすべて灰燼となり、研究熱心な師匠の手元には、何も残らなかつた。特にその頃、「大乘起信論」について、新しい研究を進めておられたようで、それらの資料や原稿が、蔵書と共に焼失したことに、大きなショックを受けられたようであつた。学僧として高名な師匠であつてみれば、その心中は察するに余りあるものがあつた。

しかし私は、後でそうした事も聞いたのであつて、とも角師匠に会えて嬉しかった。ただ私の頭の中には、かつての厳しい、おそろしい師匠のイメージだけがあつて、師匠の前に端座して、緊張しながら話をしていた。

「おまえは、タバコを吸はないのか。吸ってもいいよ」

突然師匠は、そういつて灰皿を私の前にすすめた。私はびっくりした。事実私は、その頃、タバコを吸い初めていた。軍隊で吸うようになっていたのである。しかし、師匠に叱られては大変と、そのそぶりは見せなかつた。その師匠から、このような声をかけられようとは、夢にも考えていなかった。それだけに、驚きもし、嬉しくもあつた。

「それでは、失礼します」

私は、おそろおそろながら、一服タバコを吸わしてもらつた。今までにない師弟のぬくもりを、この時、改めて感じていた。

「肩でももみましょるか」

師匠の温い言葉に、気もほぐれて、私はこういうと、

「少しもんでくれ」

とすぐ応ぜられた。喜んで私は、軍服をぬいで、師匠の後ろにまわり、師匠の肩をもみ始めた。師匠は気持ちよさそうにしながら、何かと話をされていた。その中には、「大乘起信論」の撰述問題があった。起信論の思想の中に、老莊道家の思想が見られるところから、中国撰述説を考えられているようであった。

しかし、永い間の軍隊生活で学問を離れていた事や、その事自体が難しい思想問題であったため、私には一向よく分らなかった。そのため、私は適当に返事をしながら、肩もみの方に力を入れていた。今にして思えば、あの時、もっとよく聞いておけばよかったと思うのであるが、後の祭である。そして生涯において、師匠と学問らしい話をしたのは、これが最初でしかも最後であった。

その日の夕方、別れを惜しみつつ師匠のもとを去り、帰隊の途についたのである、これが永久の別れとなったのであった。七月も下旬の頃と思われ、千本松原に敵の艦載機も飛んできて機銃掃射をして行った。兵隊となつて、敵の弾の下をくぐったのも、これが最初で、最後で

あった。そして再び夜行列車で、艦砲射撃の中を、福知山へと帰って行った。

日本はそれから間もなく降服することとなる。私自身こうした結果になることは、夢にも考えていなかっただけに、日本の敗戦に大きなショックを受けた。

早速私は、臨時憲兵にさせられ、大阪の豊中に派遣された。アメリカ軍上陸に伴なうトラブルを避けるためであった。しかし、その任務もなんのしばらくで、九月十七日に除隊となり、荷物をまとめて師籍へと向うことにした。途中、京都に立ち寄り、なつかしい百万遍にお詣りした。幸い、京都は空襲も受けず、無事であった。本山に着いて挨拶に寺務所を訪れた所、執事の誰かに、

「丁度よい所にこられた。これから林彦明上人の追悼会を行いたいと思いますので、お焼香をしていって下さい」

と言われて、始めて師匠が遷化されたことを知った九月九日に遷化されていたのであった。驚いた私は、取るものも取り敢えず、沼津に向った。

(つづく)

(行) (紀) (真) (写)

“時代”を歩く……(1)

江戸の心

新しい年、昭和も六十一年を迎えた。月日の経過は早いもの、いろんな考えをめぐらしているうちに、いつの間にか十二月になってしまう。

しかし一年をかえりみると、多くの事件や出来ごとが報道されている。それらは歴史の一ページとして、善悪を問わず記録され、後の世代へと残されてゆく。年が移り新しい時代となれば、過去を超えた発展の文化が成長の社会を創り始める。

歴史が時代をつくるのか、時代が歴史を記

録するの、いずれにしても、人間と歴史↓時代とは切り離せない関係にある。

歴史の研究家でもないのに、下手な持論をいう必要はないが、つねに「時代」と私たちの生活は密接な繋がりをもっている。

大きく表現するならば、過去・現在そして次の新しい世界に於てもそれぞれの時代が築き上げた資産が、人類の進歩における支柱となっていることを忘れてはならない。

時代と歴史を訪ねて散策するとき、今まで見落されてきた「文化」を発見することでも

とい
かわ
しょう
どう
問
川
彰
道



——神田明神境内——

きよう。

◇

◇

◇

「時代を歩く」など、大見得を張ったものの、さてどこへ行ったら発見があるのか、さっぱり見当もつかない。どんな内容がこのテーマにふさわしいのか、これまたハッキリしていない始末である。どうしようかと悩んで、地図でも見ようかと本屋さんに入った。新刊の書物を見まわしているうちに、たくさんのおすすめ小説群の中に、時代小説が五、六種類も積んであった、いずれも捕物帳ばかりである。いまさら捕物小説などと気にも止めず、東京都の地図帖を購入して書店を出た。しかしどうもあの時代小説群が気になる、特に読みたいというほどでもないが、何かのヒントがあるようにも思える。近頃、推理小説と並んで時代小説の新刊もたくさん出るようになってきた。現代とは違う何か時代物には描かれているのが興味深いものである。

ところで、捕物帳といえはすぐに思い浮かぶのが銭形平次である。平次親分は神田明神下に住んでいた。……そうだ、……やっと目的の場所が見つかりそうである……神田明神、まだ一度も参拝したことがない。きつと何かを発見することができにちがいないと心に決め、日をあらため神田明神様へ出向く。

国電・お茶の水駅、神田寄り改札口を出て左の聖橋を渡り、まっすぐ進むと本郷通りにぶつかる、右へ坂を下り始めてすぐ大鳥居を見つけることができる。付近には甘酒の店、休憩所などが二、三ある、寺と同じような山門があり、そこに次のような由来書きが掲示されている。

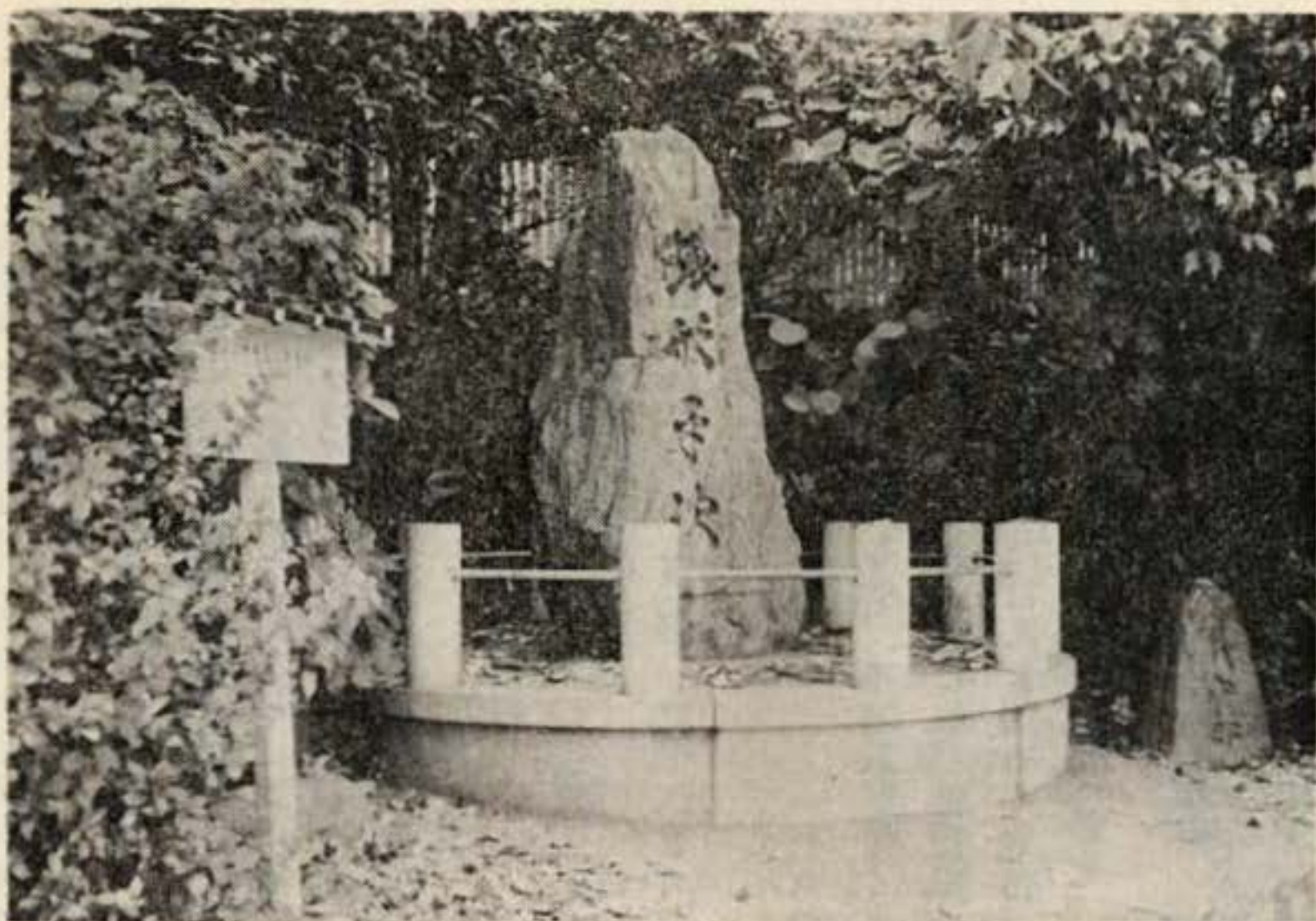
「社伝によると聖武天皇の御代、武蔵国豊島郡芝崎の浜辺(現・皇居大手門前)に宮居を定められてより一千数百年、その間、鎌倉時代に時宗二祖真教上人

は、平将門公の霊を鎮めて当社に祀り、さらに元和二年、二代將軍秀忠公は現在地に壮麗な社殿を造営し、遷座のうえ、江戸の総鎮守の神として代々尊信せられ、明治九年、明治天皇の行幸を仰いだ」

つまりこの神社は最初、現代の大手町近辺に建立され、徳川二代將軍秀忠公によりこの地に移築され、大規模な社殿が大成したのである。

神田の明神さま、正式には神田神社と称する。江戸庶民の繁栄と安全を祈願する場として、日々にぎわいを呈していたという。

当時この神社で毎年九月に行われていた神田祭りは、六月の山王まつりと合わせて盛大に催され、元禄元年より、江戸城内に於てもその開催が許可され、將軍はもちろんのこと重臣・大奥の人々までこの祭りを観覧し、江



——錢形平次と八五郎の碑——

戸ッ子氣質あふれたさまざまな芸が披露されていた。

神田明神の社殿に入ると、朱塗りの本殿がすぐ正面に見える。まっすぐ向ってサイセン箱に浄財を入れ、手を合わす。

平将門・徳川秀忠公の各精霊に対し、心よりごあいさつ申し上げ、明神さまには厚く祈願の礼をいたしてきた。

周囲をひと歩きすると本殿右手に「明治天皇行幸」の碑、また平次親分が住んでいた明神下を見おろす位置には、「錢形平次」「八五郎」両者の石碑が建てられてあった。現代の平次親分こと、故大川橋蔵さんも毎年ここに参詣したと記されている。

江戸の市中を警視する所が奉行所。南と北の二つがあり、月番制といって毎月どちらかの奉行所が責任をもって、江戸を管轄していた。奉行所長のことを奉行とよび、配下に与

力・同心がいたのであるが、江戸市中に起こった犯罪を細かく探査するには、情報とてあまりなく、やはり町の人々に任務をゆずったほうが、早く犯人を突きとめることができ、そこで平次親分のご登場を願うわけだ。身分としては、目明し・岡っ引きにあたるのである。

「御用ッ、神妙にせい」

闇の中から不意に飛出した平次とガラッ八。

「何をッ」

手が廻ったと見るや、井崎八郎早くも一刀を引抜いて身構えました。番頭風の男と勘次の手には夜目にも閃めく七首。

「親分、三人じゃ手におえねえ。錢をッ」
「おうッ」

三方から斬りかかるのを引っ外して、平次の手が懐中に入ると、久し振りの投げ錢。闇を剪って一枚、二枚、三枚ヒュ

ッヒュッと飛びます。……

（野村胡堂『銭形平次捕物控』「濡れた千両箱」より）

明神さまの境内を一巡していると、今にも八五郎を従えた平次親分がさっそうと歩いて来そうな気がしてくる、この場所は東京の中の江戸である。

ウィークデーの午後にもかかわらず、散策している人は結構多い。サラリーマンらしい数人、重役タイプの男性、ヤングの娘さんたちなど、それぞれがこの地にひとときの安らぎを求めてきているのであろう。

時代の心、江戸の心は現代にも強く生きている。また、大東京発展を見守る、かの徳川秀忠公の精神が、この境域に厳然と鎮座されている感じを味わった。深々と拝礼して社殿を退出した次第である。

ただちに刑吏は訳経場の弘福寺へ走った。

「女人と戯れているような顔ではありませんでした」

御史台へ引かれてきた弁機法師を目撃したのであろう。顛末を報告する王徐明は善導に告げた。

「どのような顔をしていましたか」

「げっそり頬はこけ、何やら異国語がべったりと書きこまれてある樹皮を片時も手離さず……」

「瑜伽師地論でしょう」

すでに訳し終えてはいたが、なお完璧を期するために弁機は推敲の筆を入れていたにちがいない。獄房へ閉じこめられても仕事を続けているという。

「取調べにあたってでも司直の言うがままだそうです」

「いたずらに抗弁、釈明するのも面倒なのでしよう」

善導は痛ましい思いで眉をしかめる。

たしかに傲慢不遜、鼻持ちならないエリート意識をひけらかせてくる弁機ではあった。だが經典と取り組む姿勢には水火も恐れぬ不退転なものがあった。善導の忠告を「お申越しの条、自他共に無用のこと」と突き放した態度も、この粹組でとらえて評価しなければなるまい。

「しかし、出来すぎた話ですねえ」

と善導は若き吏生の顔をまともに見返した。いや、すでにそれほど若くはなかった。

着実に一步步つ吏僚の階段を登ってきた老練者の皺がきざまれていた。

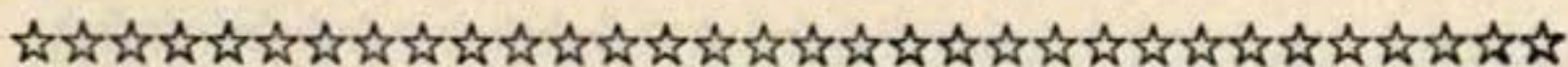
「そうでしょうか」

さりげなくトボける。

「女枕が彼の草庵で発見された。つい昨夜まで同衾していた、という風情ですねえ。だから即座に逮捕した。しかも犯人のはずの男は、まるで無関心である」

「……」

「逮捕するためにお膳立てがととのえられ



極
刑



の条、自他共に無用のこと」どころではなかった。どんなに理性でおさえつけても肉体の痛苦が発する絶叫を喰い止めることはできない。

善導は眼を伏せた。くり返し口中で念仏を唱えるだけだ。

人間はこんな残忍な仕打ちを考えつくのであろうか。またこんな仕打ちを体験しなければならぬのであろうか。

もはや人間は信用ならなかった。阿弥陀仏以外に頼れぬではないか。

ではその阿弥陀仏。法蔵比丘が仏と成られた変身であるならば、どんなお姿をしていたのであろうか。善導は弁機の絶命を見届けないまま。西市場の処刑場を離れていった。

實際寺へ戻る道筋すら何処を歩いたのか、記憶していなかった。想念を集中した。ひたすらに阿弥陀仏のお姿——仏身を凝視した。虚空の痕跡もない断面に熱い祈りだけをそそ

いで、仏身の体線を描き出そうとした。

實際寺へ帰り着いたとき、未だ夕陽の残光があった。すでに実も葉も枯れ落ちた柿の木が悄然と立ちつくしていた。

善導は、その細い柿の木の立ち姿に見入った。

悄然と見えたのは瞬時のことで、じきに幹は豊かに肉付いてきて、かかげた枯れ枝は四肢に見えてきた。

頂空に近い空間にお顔らしきもののさえ浮かびあがってくる。

これぞ阿弥陀如来の現身ではないか。一糸まとわぬ裸形であった。

お顔の詳細がわかる。両眼は広く長く、黒白は鮮明だった。眼底からは強烈な光りが発光している。鼻筋は見事にとおっていて垂直である。黄金の延べ棒を思わせる。

耳たぶはふさふさと垂れ下がり、耳孔には七本の毛筋まで見えた。その毛筋の一本一本から光りがあふれ出ていた。

おお、あれがお唇であるか。真紅に輝いている。そのなかの歯はびっしりと並んで白く、月光にうつし出された貝そのままだ。舌は薄く長く、かつ広々としていた。触れてみたらどれほど柔軟なタッチであらうか。ふんだんな唾液で濡れている。

胸を見つめていると心王（心臓）までが透けて見えた。紅蓮華そのままだった。開いているように開かず、閉じているように閉じられていない。そこには八万四千の花弁が重なり合い、そこから発する光明は蓮華をまき散らす。

体毛は金色で、お首の線や両の肩を円ろらかに描き出している。手のひらはふくよかで、指はしなやかに伸びる。指と指の間には水も洩らさぬ網縵が張られ、爪は赤銅色に輝く。

腹部の詳細も見えてきた。

お臍はまるく、その穴を深々としていた。そこから光りがさし出しており、あますと

ころなく照らし出していた。

その下にあるはずの男根――

善導は処刑場に仰臥させられた若き法師弁機の裸身を思いうかべた。男根の所在も遠望できた。体毛のなかに萎えた黒ずんだ肉塊があった。

哀れであった。あんな肉塊の一片が、若い生涯と素晴らしい頭脳とを、瞬時の間に崩壊させてしまったとは。

人妻高陽公主とのただれた闇で、さぞかしあの肉塊は王者の如く振舞ったことであろう。むかえ入れる高陽公主もまた、全人格と知能を、あるいは未来までをもささやかな肉の断面に集中させてしまい、忘我の悦楽に身悶えをくり返したはずである。

二人があげた歓喜の叫びは、そのまま「腰斬」の刑におけるあのうめきへ直結してしまったのではないか。

たとえ今回は、冤罪だったとしてもあのころは、つまり五年前弁機の草庵を初めて善導

が訪れたころは、露見しない密事を楽しんで
いたことにまぎれもない。露見する、しない
が問題ではないのである。ツケの支払いは、
いつかは決済をしなければならぬ。

そんな思いを逍遙しながら柿の木をあらた
めて見た。もとの枯れ木になってしまい、阿
弥陀仏のお姿なぞどこにもなかった。

弁機を思いうかべたこと自体に雑念の
雲が立ち現れる結果を招いたのか、と善導は
「観仏」の峻厳さをあらためて思い知った。

弁機を思いうかべたことで、善導も姦淫の渦
へ巻きこまれてしまったようだ。純一無雑に
ならなければ、阿弥陀仏の真身は見えてこな
いのであろうか。

だからこそわれら凡愚は念仏を唱えて、見
えない阿弥陀仏の慈悲を求めるのだ、と善導
は兼ての唱導に誤まりなかったという確信を
深くした。

十二

その晩も若き吏生の王徐明がやってきた。
げっそりとうちひしがれた表情だった。

「どうしましたか」

善導は明るく声をかけてやった。

「いや、今日という今日は勤めが嫌になっ
てしまいました」

「何があったんですか」

「人を殺させられたからです」

「殺させられたとは？」

「命令でした。十四人も首を絞めたんです
よ。それがみんな女人です」

「女人を殺したんですか」

善導も息をのんだ。

若き法師弁機を処刑したあと、太宗はわが
娘高陽公主に仕えていた侍女たち全員を殺す
ことを思い立った。娘の不行跡の責任は侍女
たちにもある。つまり彼女らが監視を厳に

し、女主人の他出をさえぎっていたら、こんな事態にはならなかった。という帝王らしい発想だった。

ただし、その処刑は太極宮内で隠密裡に執行しなければならぬ。外部に洩れたらわが娘高陽公主の不行跡が明るみへ出てしまうからだ。あの弁機処刑の日、長安西市場へ集った群衆の全員が、皇女密通の事実を知っていたにもかかわらず、太宗としてはあくまでも隠くしとおしたかったのである。

執行者を、あえて刑部を避けて中書省に求めてきた。

中書省は詔勅や政令の起草をする部署である。朝から晩まで筆を握って暮す役人が集っている。王徐明もその吏生の一員だった。

誰でも人殺しは嫌である。中書省の「役付き」たちはみんな逃げた。若い王徐明たち二人に役が振りあてられた。反古になった詔書類などをつめこんだ石造りの倉庫が臨時の処刑場となった。

侍女は一人づつ呼び入れられた。新しい制服を支給するから、とサイズを測定するように見せかけ、細引きを身体のあちらこちらへ掛けていくうちに首にまわし、絞めあげてしまふ方法だった。

「女は新しいものを着せてやると言えば、十人が十人、いそいそと悦んでついてきてしまうのです。青い制服を背中に羽おってやると、誰もが心地良げに眼を閉じます。首の周囲の寸法を計っておこう、と細紐をまわすと、誰一人例外なく首をさしのべてきました」

二巻き三巻きして王徐明は手もとに呪いの力を加えるわけだが、

「……新しい衣裳を与えられる、と信じきって、そのまま絶命してゆくためか、どの死に顔も安らかでした。夢見心地のまま果てていたという感じです。それだけに、手もとへ残る罪悪感はひとしおです」

未だそこにこびりついているように王徐明

は、しきりと揉みしだいている。

官女の青衣は初唐のころからあったが、首の部分強く締めつけているスタイルはこの処刑が執行されてからだと言われる。新しい衣裳をまといながら首を絞められていった官女たち——その哀れさをしのんだ首まわりの飾り模様であったか。あるいは首のサイズを他人に計測させてはならぬ、という警告をこめて、あらかじめ既製にしておいたものか。いずれであるかは不明にしても、宮廷の悲劇を伝え残すファッションだったようである。

「和上、わたしはもう官途を去ろうかと考えています。あのような酷薄な命令を受けてもそれを拒むことができないのです。殺される者と同量の、あるいはそれ以上の苦しみがわが身に残ります」

「どこへいってもその苦しみは同じでしょう」

善導は静かに言った。

「そうでしょか。たとえば和上のように出

家すれば……」

「出家したとて弁機法師のような運命に遭遇する人もいますよ。人間、生きてゆけば必ずどこかで遭遇するでありましょう」

「みんなが殺したり殺されたりするのですか」

「そうです。ただし、なかには紙一枚のところで免かれる好運な者もいます。現在の私たちもその好運者でありましょう」

「いまの私たちは好運者？」

「そう考えるべきです……ちょっと戸外へ出ましょうか」

善導は誘いの言葉をかけながら立ちあがった。

すでに夜気が實際寺の庭をくるみこんでいた。しかし白い月は鋭い光りを投げかけ、あの柿の木を鮮明に浮かびあがらせる。枯れ枝は人骨を思わせた。

「貴郎はこの柿の葉で手習いをやった」

「そうです。紙をあがなう銭がなかったので

阿弥陀仏の男根が円ろらかで平和なただずである姿を想いえがくがよい、と書く。陰蔵とは男根である。それは十五夜の月の如くであり、しかも腹背に隠れていて突出するのではないという。

この陰蔵相を思いうかべれば、好色な男女もたちまち欲望を消散させ、そのエネルギーを健康な生命保持に転化させることができるであろう、と仏は教えているのである。

かつて釈尊が沙羅双樹林で入滅した折、そこに住むジャイナ教徒たちによって男根をむかれた、という伝説がある。その折、好奇の視線をふりそそいだ異教徒たちは、たちまち色慾の空しさを教えられたということだ。

ふり払っても断絶しても湧きあがってくる欲望。そのために道を踏み迷い、命を失う男女が、この地上には幾万といることか。いつの時代にもこの罪障は消え去らない。

あえてそれをふう払うとか、断絶しようなどと思ふな。直視せよ。直視するなかで、こ

の欲望の肉塊を正常なエネルギーへ転化させることを勧奨する善導教学の面目が躍如としている。まさしくこの「観念法門」の文章は、陰蔵を汚がらわしい物、罪の肉腫などと否定してはいないのである。「陰蔵ノ相、平満ニシテ肉ヲ十五日夜ノ月ノ如クナルヲ。亦腹背ノ如ク平処ニシテ別ルル無シ」ということである。

十五夜の満月のように円く美しくおだやかで、さりとて猛々しく突出することではなく、肉体の一部として腹背におさまって、特別な筋骨ではない、と言いきっている。

阿弥陀如来の仏身観想にかりて、長安第一の美僧とうたわれた善導の女人観、性慾への対処、消散をゆくりなくも語っているように思われる。そして、ここまで昇華できた一因として若き碩学、弁機の受難を忘れてはなるまい。

(つづく)

新年賀謹

埼玉工業大学

松川文豪

東山学園長

石井俊恭

鎌倉大仏殿高德院

佐藤密雄

淑徳中学校長

淑徳高等学校長

里見達人

上宮学園

理事長・学園長 鵜飼隆玄

高等学校長 鵜飼光順

大原山 西福寺

鵜飼隆玄

〒174 東京都板橋区前野町五一四一一

〒543 大阪市天王寺区上之宮町三一六

鎮西学園理事長

鎮西高等学校長

真和中・高等学校長

上田祐規

〒862 熊本市九品寺三一一一一

神田寺（旧法禅寺・安良寺）

学校法人真理学園・神田寺幼稚園

友松諦道

〒101 東京都千代田区外神田三一四一一〇
電話（〇三）二五一八六八三〇五

萩市 常念寺

老隠古本超然

学校法人 芝学園
理事長

豊岡益人

学校長

徳久鐵郎

法然上人降誕聖地

美作 誕生寺

岡山県久米郡久米南町

電話（〇八六七二）八一二二〇二

寺内大吉

〒248 鎌倉市長谷四一二二八

新年賀謹

浄土宗宗議会議員

伊東康雄

龍泉寺住職

本山光明寺執事長

西念寺住職

北邨謙順

〒250-002 南足柄市沼田三一五

回向院住職

本多清敏

〒130 東京都墨田区両国二一八一〇

稻田稔界

おてらはみなさんのそうだんしよ
桜と観音さまのお寺

正念寺・是田寺

浄心寺

小池政雄

称名寺住職

須藤隆仙

〒040 函館市船見町一八一四

電話(〇二三八)二六一五二三五

中島真哉

青山梅窓院

〒107 東京都港区南青山二二二六―三八

教安寺住職

野呂幸進

〒210 川崎市川崎区小川町六一二

電話(〇四四)二二二―四九四六

〒151

東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六一一

清岸寺

原口徳正

松庵寺内無為窟主

小川金英

〒025 花巻市双葉町六一四

仏教福祉センターよるひる銀行

〒030 青森市本町一―一―一二

正覚寺住職

楠美知行

光運寺住職

飯田信弘

〒510 四日市市中部三―一二二

新年賀謹

法然上人二十五靈場
第二番仏生山法然寺

細井俊明

伝通院住職

吉川哲雄

〒112 東京都文京区小石川三―一四―六

岩手教区教化団長
圓光寺住職

加藤順底

〒020 盛岡市南大通三―一二―四九

北川一有

長寿院

〒111 東京都台東区鳥越二―一三―一八

〒113 東京都文京区本郷一―八―三

昌清寺

住職 服部光順

電話(〇三)八一―一三三七二

檀王法林寺

だん王保育園・児童館

信ヶ原良文

京都・三条大橋東詰

群馬教区長

野口善雄

〒376 桐生市本町六―三九八 浄運寺

西住院

戸川靈俊

〒606 京都市左京区黒谷町三〇

近龍寺住職

松濤弘道

〒328 栃木市万町二二―四

電話(〇二八二)二二―一〇八〇二

芳泉寺

柳楽真純

社会福祉法人 大慈会・かんぎおん

〒386 上田市常磐城三―七―四八

浄土宗教学局長

大田秀三

〒370 高崎市通町九〇 安国寺

慈光ビル(〇二七三)二三―四〇〇〇

〒440 豊橋市関屋町二二―二

悟真寺

住職 立松 辨成

電話(〇五三二)五二―五五六六

新年賀謹

遇斯庵主

谷地益雄

〒045 岩手県花巻市四日町一―一二一四七

廣隆寺内

晴雲寺住職

塚田弘導

〒254 平塚市立野町六―一五

浄土宗鎮西流根元地

聖光寺

小林忍戒

龍泉寺住職

瀧沢教夫

〒405 山梨市市川二―一五一

お骨仏の寺 一心寺

貫主高口恭行

〒543 大阪市天王寺区逢阪二―八―六九

電話(〇六)七七二―〇三七二(代)

摂取院住職

聖徳保育園長

金子貫達

〒850 長崎市銭座町四―一五九

聖徳寺中

大松寺

〒108 東京都港区三田四―一―三八

新善光寺住職

太田隆賢

〒064 札幌市中央区南六条西二丁目

光心寺

北山良祐

正雲寺

〒980 仙台市新寺五―八―三七

雲上寺住職

東海林良雲

〒985 塩釜市南町二―一―一

祐天寺住職

巖谷勝業

〒153 目黒区中目黒五―二四―五三

◎読者の皆様へのお願

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）
- 一、枚数 四百字用紙八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十二巻 正月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十年十二月二十五日 印刷

昭和六十一年一月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八―八二―一八七番

新年賀謹

總本山 知恩院

門主 藤井実応

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

〒170

東京都豊島区西巢鴨三―二〇―一

大正大学

電話(〇三)九一八―七三一―代表

大本山 増上寺

法王 中村康隆

大本山 善導寺

法主 一田善寿

〒603

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

佛教大学

電話(〇七五)四九一―一二四―代表
通信教育部 四九一―〇二三九

大本山 金戒光明寺

法主 稻岡覚順

大本山 光明寺

法主 藤吉慈海

学校法人 大乘淑徳学園

淑徳短期大学

理事長 学長 長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五―三―七

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

京都文教短期大学

学長大橋俊有

〒611 宇治市横島町八〇